

## パネルディスカッション（セッションⅡ）

司 会：平野由紀子

パネリスト：清水婦久子、エステル レジェリー＝ポエール、渡辺雅子、原山絵美子

（敬称略）

平野：先ほど質問表を出して頂きまして、一人一人の方々に質問があります。

最初に清水先生への質問から読ませて頂きます。

### 清水婦久子先生への質問

質問者：諸井（お茶の水女子大学院生）

国宝源氏物語の絵巻において源氏物語原文を上手く用いて詞書本文をもとに絵を作った、と思います。国宝源氏物語が作られた時代は、お話頂いたように俊成・定家の源氏物語に対する高い評価がなされた時代ですので、源氏物語原文の深い読み込みをした上で絵巻の詞書絵が作られたと思います。江戸時代の源氏絵の場合も源氏物語の原文を読んだものなののでしょうか。それとも源氏小鏡などのダイジェスト版、またそれ以前の源氏絵の影響で絵が描かれたのでしょうか。

清水：江戸時代の版本について、よろしいでしょうか。

江戸時代の版本にはいろいろ種類がございます。先ほどから皆様に紹介しています『絵入源氏物語』、山本春正の『絵入源氏』が一番初めに作られた絵入り版本です。この本は単に挿絵入りというだけではなく、源氏物語の本文に、読点や濁点、振り仮名、細かい注、誰が台詞を言っているか主語が何であるということ、初めて付けた最初の印刷物です。それまでの本ですと、研究された結果を注の形で書き込んで写したものが伝わっていますが、それを印刷物として初めて注を入れて、句読点も濁点も一切なかった本文に、読点・濁点をつけて揃えた最初の解釈本文の形で出版された本です。そこに挿絵を加えてあるので、本文を読むところから出発してあるのです。

つまり、本文を読んだ結果が挿絵として反映されているということです。全部で54巻226図ありますけれども、そのうち古来の絵の影響を受けた挿絵ももちろんあって、源氏の巻一つずつの絵が伝わってきたことは大きいのですが、226図となりますと、それ以外に源氏物語の一字一句を読む中で出てきた独自の絵もございます。あとがきに春正自身が書いていますが、俳諧の大師匠でありました松永貞徳から源氏物語の読みを受け継いで作ったとあります。松永貞徳という人は、細川幽齋、九条植通という、それぞれ古典の注釈で有名な人と深いかかわりを持ち、友人としても付き合っていた人で、古典の伝授がされているという人なのですが、その貞徳が山本春正に指導をしながら作ったという本が『絵入源氏』なのです。その挿絵がどの程度の独自性があるかということについては、また別に検討する必要がありますが、とにかく、本文と合わせながらそれを読み解くなかでできた作品であるということです。

『絵入源氏』以外にはダイジェスト版も沢山ありまして、野々口立圃という俳諧師が、ダイジェストの形で作った十巻の『十帖源氏』もあります。その中には、ダイジェストにまとめる段階で大きな独自性を持って作った絵もありますが、一方で、野々口立圃自身が狩野探幽の指導を受けて描いたというようなものもあるようで、具体的に狩野派の流れとどういう関係にあるかは一概には言えないのですが、そういった絵もあります。『源氏小鏡』には何種類もあって、江戸の『源氏小鏡』と違ひまして、京都で作られた『源氏小鏡』では、土佐光吉などの絵の影響を受けていると思える絵もあります。この場合は、本文との直接の関わりよりも、むしろ土佐派の絵の影響を直接受けたものと思われます。そういう風に木版本の絵というものには本当に色々ありまして、詳しくは『源氏物語版本の研究』をお読みいただけたらと思います。

平野：どうもありがとうございました。続けて絵の方のご質問にまいりまして、エステル・ポエール先生に質

問がきております。

エステル レジェリー＝ポエール先生への質問

質問者：重田（お茶の水女子大学院生）

上から見ると草花が立体的に見えるというようなことを仰っていましたが、他にも下に広げたものを見下ろすように見るとよりよく見える描写などはあるのでしょうか。日本の展示ではそういう見方が殆どなのですけども。

レジェリー：この絵を初めて見た時、つまり所有者の家に行った時、絵は額に入っており、壁にかけてありました。西洋のタブローの様な展示でしたが、壁からはずしてもらって、机の上に乗せてもらったら、上から見る事ができました。特に視点を低くして見たら、草花が立体的に見えるのが印象的でした。

日本の絵画を全体的にみると、絵巻も屏風も視点を自由に変えながら鑑賞することができます。見ている人の視点の位置によって絵が与える印象が変わるというのは当然なのではないかと思います。ただし、光の問題も入ってきます。作品を自然な光で見た方が立体的に見えると思います。

平野：よろしいでしょうか。発展的にさらにということがあれば、後でまた伺いたいと思います。

渡辺雅子先生に質問です。

渡辺雅子先生への質問

最古の源氏物語絵巻は紫式部の考えを表すのでしょうか。それとも、それより2世紀後の12世紀のアーティストの解釈を表すのですか。つまり、絵巻は誰の解釈ですか、という問題です。

渡辺：それはやはり絵巻を制作した人たちの解釈だと思いますが、国宝源氏物語絵巻について言えば12世紀前半当時のコンテクストにある程度は縛られつつも、それ以前の過去の伝統の中で培われたものを大部分は引き継いでいると思います。ここでの主要部分の解釈はそれほど変わってないでしょう。例えば語り手である女房の役割は11世紀のテキストでも12世紀の絵巻でも重要な役割をになって表現されています。この女房たちが物語世界と享受者(読者)の距離感をコントロールして常に変動しているわけで、12世紀の制作者たちと11世紀の筆者紫式部との間では王朝文化の基本構造はそれほどずれてないだろうと思います。むしろ王朝文化を謳歌した時代が12世紀前半といえましょう。

平野：ありがとうございました。この点についてパネラーの先生方何か意見などありますか。エステル先生は何か。

レジェリー：確かに絵はいくつかの伝統が交叉するところに位置づけられると思います。つまり、伝統を受けながら、その制作された時代の感性なども潜めているんです。例えば、私の発表では、眺める構図、眺める人物という構図を取り上げましたが、江戸時代以前は源氏絵においてはこの様な構図は殆どないと説明しました。ただし、元になった構図はあります。源氏絵ではないんですが、それは伊勢絵だと想定することができます。男の人が前の年に女の人が去ってしまった家において、庭の梅の木を見ながら、その女を思い出している場面です。梅がちょうど女を象徴しているのです。この場面は伊勢絵の中でずっと平安後期からありますけれども、源氏絵の方では、同じような構図は江戸時代に入ってから本格的に現れるようになりました。それは江戸時代の感性と関連があるのではないかと思います。

平野：誰か他にご意見ありますか。清水先生。

清水：今のお考えを受けますと、嵯峨本の影響は明らかに受けていると思いますので、その点で「眺める人物」

が『絵入源氏』にたくさん描かれたのだと思われます。『源氏物語絵巻』の詞書のことを先ほど少し申しましたが、源氏物語そのものの本文と少し違って抜き出してあるので、その抜き出しの時に『絵巻』も製作者の新しい考え方が出たと。それが絵と深く関わっているということが言えると思います。詞書と絵との関連が非常に密接だと感じられるのですが、本文原文そのものと詞書とでは若干異なると、そこを見ていくことで、絵巻の製作者の意図がわかるかと、私自身はそう思っています。

平野：いいですか。

原山絵美子さんへの質問

質問者：名前なし

『あさきゆめみし』の桐壺巻の改編について教えて欲しい。

平野：これはちょっと仰ったから、どういう内容かということだけ教えて下さい。

原山：桐壺巻の改編というのは、桐壺更衣が夜中に宮中を歩き回っているシーンがあり、そこで名乗りあわずに桐壺更衣と桐壺帝が会って、私は月読だと桐壺帝が言う場面が出てきます。原文ではとてもそんなロマンチックな場面は想定できないところですが、まず難しい作品だと読者に思われてしまっては困るので、内容を改編して読者に受け入れられるようにしたのだということを作者の大和和紀さんは仰っていました。

平野：何か衣を用意するという話もあるのでしょうか？

原山：そうですね。桐壺更衣が桐壺帝の衣装を整えており、猫のいたずらで木にひっかかった衣を介して（桐壺帝と桐壺更衣が）出会う場面になっています。

清水婦久子先生への質問

質問者：名前なし

俊成、定家が源氏の中で特に「須磨」の巻を高く評価したのですか。また、レジュメ9の源氏物語の歌と巻名のところの巻名を教えてください。

平野：巻名についてはご自分でよんで頂くことにして、「須磨」の評価についてはいかがでしょうか。

清水：『源氏』の中でどれを高く評価したかということ、「花の宴」の巻を特に「艶なり」と評価したということはあるのですが、「須磨」に限っては、それを題材として歌がたくさん詠まれたところを見ると、それも高く評価しただろうと判断して、わかり易い例として挙げさせていただいたということです。

清水婦久子先生への質問

質問者：高野瀬（総合研究大学院大学大学院生）

興味深く楽しく拝聴致しました。源氏絵が和歌と深く関わっているということは、『源氏物語』成立以前からある屏風絵、絵と歌が互いに補い合っ一つの世界を作るという屏風絵の伝統の上に、『源氏物語』とその絵がある、ということになるかと思いますが、源氏以前の伝統の反映や関係についてはどうなのでしょう。

清水：関係はあると思います。『源氏物語の風景と和歌』の中でも書いたのですが、源氏物語と絵画性について絵画を意識したということは、紫式部自身がたびたび言っており、『紫式部集』にも出て来るのですが、絵をより意識して歌を詠んだり、場面を書いたりということがありまして、源氏物語の中にも絵に感動

したという所があります。『源氏』の中で、また『枕草子』でもそうですが、仮名文学がある程度発展していく段階で、絵というものを文字化していく、文章化していくというような試みがどんどん盛んになってきた、それが10世紀半ばから源氏物語の時代にかけてです。それは当然、それ以前に屏風が作られてそこに歌を書きつけたという文化との関係もあるでしょうし、仮名というものが十分になかった時期に絵がたくさん描かれたという文化があって、それを文字に文章化していくという方向にあった時代だったと考えます。『源氏』以前の、絵とともに歌を詠んだということが発展してきて、それが更に源氏物語ができた後に発展したのだと思います。

平野：ありがとうございました。まだ15分くらいありますので他にも質問を受け付けます。いかがでしょうか。とにかく消化しきれない位の情報量があり、とても素晴らしいご発表が続きましたので、整理するのも難しく、取捨選択しておりますが、一つ、享受する人たちの存在について、これは重田さんという方の同じ質問表の中からです。

#### 清水婦久子先生への質問

(質問者) 重田 (お茶の水女子大学院生)

絵入り源氏と屏風ではその受容者層が異なると思われるが構図などに違いはありますか。

清水：構図はそんなに変わらないと思います。屏風絵という大画面になりますと明らかに横長ですので、意識して雄大な絵を作っているように思いますが、『絵入源氏』でも見開きの絵では横長で作っています。

それから享受層ということですが、五十四帖屏風を部屋に立てまして、気に入った絵があれば、持っている本の中から、例えば柏木の巻の絵が気に入ったら、そこで柏木の巻を取り出して読むといったようなことも行われていたと思います。屏風をお嫁入り道具に持っていったとか、お祝いで作られた屏風であれば、それに合わせて、お嫁入りに持って行った本を取り出して見るということもあったと思います。

『絵入源氏』の享受の層も、大体町人のお嬢さんなどが対象になっていまして、そういう人たちは写本本では持っていないけれども、印刷したものを持っていたということがあります。その中でも、今回、「源氏物語千年紀展」で紹介しました京大本は、その挿絵の上に奈良絵本のような彩色をして、それをお嫁入りの時に持っていったということがあるようです。『絵入源氏』だけでも、身分が高くないけれども金持ちのお嬢さんが持っていたケースと、自分が勉強したいからと教科書的に使う人もいて、いろんな範囲の層の読者がいたのではないかと思います。

平野：その所、さっき渡辺先生がおっしゃいましたが、今もう一つ追加で、高山様の感想の中にあるのですが、最近の新聞で、戦国大名、例えば、信長とか家康とかが政権の正当性を裏付けるため『源氏物語』を利用(文化的パトロンとして)したという記事がありました。それについて渡辺先生いかがですか。

渡辺：それは知りませんでした。

平野：そうですか。じゃあ、それとは離れて、先ほどの公家と武家の文化のことについてもう少し詳しくおっしゃって頂けますか。

渡辺：鎌倉時代に武士が政権を握ったあと、武士にとっては王朝文化というのはコンプレックスの象徴で、常に王朝文化に近づこう近づこうとします。実朝はそのよい例だと思うのですが、その傾向は江戸時代終わりまで続くと思うのですね。そういう中で陶三郎の場合は、周防から出てきて、三郎の父弘護という人もやはり知識階級というか文化サロンに携わっていた人で、三郎の妻は確か、三条西実隆の娘というふうに、武士と公家とが結びついていく、特にほとんどしょっちゅう京都にいる、連歌師は全国へ、そういう文化人の所へ源氏物語の講義に行く、連歌と源氏物語という文化サークルが室町後期に非常に盛んになるとい

うことです。徳川美術館蔵の、土佐光則の画帖だったか、ちょっと覚えてないのですが、秀忠のあたりがパトロンとなって制作しているんですね。とすると公家文化だけで独立して行動を起こすというよりもむしろ公家と武家との勢力両方が関係している、公家にとっては、詞書を書くとかいうことで経済的にも助かるわけですね、それで武家の人たちは王朝文化を象徴する何かを持っているということで鼻が高いわけですから、そこで共同のプロジェクトができるというのは非常に自然だと思います。ただ今回の幻の絵巻はその南部藩の関係もあると図録に書いてあるらしいのですが、その辺のことで清水先生なんかご存じでしょうか。私は全然まだわかってないんですが、おもしろいなと思うんですけど。

清水：あの絵巻については、私は存じません。特別には。

渡辺：野口さんの解説だったのですが、どうも嫁入り道具だったということらしいです。東北地方の南部藩なんですね。ありえる話でもあると思うのですが、何か添状でもあるのでしょうか。武家と王朝との関係は色々あるはずですが。要するに大名たちはいろいろ集めるわけですし、例えばクリスティーズでオークションがあるたびに必ず源氏物語の屏風は何点か出ます。ということはいかに沢山描かれたかということだと思えます。大名、家老の家では源氏物語の屏風一対持っていないければ、というように文化的に身分を誇示せねばならないのです。

平野：どうもありがとうございました。源氏物語自体が奇跡的に千年もの間読まれ続けてきたのでした。どうして千年紀かといいますと、道長の娘の彰子という人が産んだ子供、その「五十日（いか）」、五十日の祝いの時に、この辺りに若紫さんがいますかということを知られて、『紫式部日記』の中に源氏に似ている人もいないのに、まして紫の上がいるわけがないって書いてある。のちに後一条天皇になる赤ちゃんの五十日なので、それが寛弘五年十一月一日だということは記録に明らかです。それで寛弘五年は1008年、少なくともその時には「若紫」の巻は流布していただろう、ということで、今年2008年は源氏物語千年紀・記念の年としていろんなイベントが企画されており、私たちのシンポジウムもその一つです。このように素晴らしい四人のパネラーの方々と皆さまの積極的なご参加のお陰で実現しました。これを企画して下さいました比較日本学教育研究センターのシュワルツ先生にも御礼申し上げます。どうもありがとうございました。今日はこれで閉じたいと思います。ありがとうございました。